

ツエツイーリエ・ベツ
セル

風呂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ストパンの二次創作です。

とはいえ作者はにわか知識しかないので、お手柔らかに。

目次

アバン	1
チャプター1	5
チャプター2 A	14

アバン



一九四〇年、七月某日。

南リベリオン大陸、ノイエ・カールスラント帝国領内、軍法会議所。

その一室には重苦しい雰囲気が漂っていた。

入り口と対面になる壁にはカールスラントの大きな国旗が掲げられている。

その国旗を背にするように4人の男が、並んで設置された長机に等間隔で座っていた。

軍服姿男達はいずれも佐官、将官クラスの者達であった。

彼らの両脇、扉や左右の壁には幾人か憲兵が武装状態で配置されており、物々しい雰囲気を放っている。

軍法会議の場であった。

これからやってくる軍人の是非を問う場である。

男達が資料を確認していると、ノックの音が響いた。

「入れ」

一人がそう告げると扉が開かれた。

外にいた憲兵に連れられて入室してきたのは、松葉杖を突き、幾重にも包帯を巻いた一人の少女。

歳は十四、五くらいの、ウィッチとしては適齡期の少女だ。

くすんだ金の短い髪、茶色い瞳は何も映つてはいないのではないかと疑つてしまいうなくらいだ。傷だらけでなければ静かで大人しいといった印象を持たれる雰囲気纏つていた。

軍服着た少女の姿には傷だらけなのとは別に一つ、大きな特徴があつた。

右脚が欠けているのだ。膝下から先が丸ごとなくなつており、一番念入りに包帯が巻かれている。

戦傷兵。その言葉が似合う姿だ。

そんな彼女は所定の位置に立ち松葉杖で身体を支えながらも、出来るだけ綺麗に敬礼する。

「ツェツィーリエ・ベッセル中尉、召喚に応じ参上いたしました」

その声はマイクを通して発せられた。

喉元には戦車隊が使う咽喉マイクが装着されている。負傷により大きな声が出せない

くなっているのだ。

「これより、ツエツイーリエ・ベッセル中尉に対する軍法会議を始める。異論はないか？」

「……いいえ」

「この会議において、いかなる虚偽の発言も行わないと皇帝に誓うか？」

「……はい」

少女、ツエツイーリエは酷く発音しにくそうに、喉元の咽喉マイクを通して返事をした。

「ではまず、かけられた嫌疑について述べる。意義のある場合はその後と言うように」

「……………」

軍規違反、命令無視、器物損壊、部隊内の上司を含む複数人に対しての殺人、その他諸々が列挙される。

「これらについて、異論はあるかね？」

「いえ、全て事実であります」

そう答える彼女の瞳には光はなく、しかし年頃の少女が発するには余りある凄味があつた。

その雰囲気、部屋の中にいる憲兵の幾人かが秘かに息を飲む。

「……そうか。では知っていることについて話してもらおうか？」

「知っている事、とは？」

「全て、だよ。君が入軍してからの三年間、人狼部隊で見聞きしたことを全て白状してもらおうか」

男達の言葉、視線、雰囲気は僅かに鋭くなる。

？や言い逃れは許さない。言外にそう言われていることを彼女は察した。

それらが認められた場合は最悪、命すらないという事も。

「……了解しました」

そして彼女は語り始める。苛烈で凄惨で、泥と血と硝煙の匂いが漂う、この世界ではよくある話を。

チャプター1



一九三七年七月、カールスラント帝国某所の片田舎。

その日、街は朝から妙な静けさに支配されていた。

そもそもが主要な街道からいくらか離れた場所にある為に元々静かな街ではあったが、それにしても静寂がすぎた。

例えば、動物たちの気配がしない。もしくは飼っている動物も怯えたように身をすくめる。

例えば、いつも流れる筈のラジオが流れない。どのチャンネルにしてもノイズばかり。

例えば、何となく身体の調子が悪い。いつも朝の挨拶を交わす隣人すらも。

住民達はなんとなく違和感としてそれらを無意識に感じながらも、それぞれの日常を始める。

始めようと、した。

最初に来たのは一条の光だった。

赤い閃光。

それがその街の日常を文字通り破壊した。

爆発音と悲鳴をBGMにそいつらは現れた。

正体不明の人類の敵、ネウロイド。

大軍勢という訳では無い。しかし、片田舎の街を瓦礫に変えるには十分な数のネウロイドが暴れる。

そしてパニックが始まった。

ネウロイドから、破壊から、死から逃れる為に住民たちは逃げ惑う。

逃げる、逃げる。しかしただの人間の足ではネウロイドから逃れる事はできない。

ネウロイドの光線に焼かれる、千切れ飛ぶ、蒸発する。それに対し人間も動物も建物もそれ以外も、等しく逃れる事はできない。

そんな地獄の中、一組の家族が周りと同じように逃げていた。

夫婦と娘の、どこにでもいそうな三人家族だ。

父親が片手で子供を抱え、反対の腕で自身の妻の手を取り必死に走る。

「ハアハア！ 急げ、追いつかれるぞ！」

「分かっているわ！ けどもう脚が」

「我慢してくれ、死んでしまつては元も子もないぞ！」

夫婦ともに特別身体能力が優れている訳でもないただの一市民だ。果ての無い全力で行うマラソンに体力が持つ訳がなかった。

それでも走るしかない。明確な死が、自分に、伴侶に、そして愛する我が子に迫っているのだから。

脚が止まるのが先か、命が尽きるのが先か。それとも――。

その答えはもうすぐ判明する。



最初に気付いたのは父親の腕に抱かれていた娘だった。

「あ」

破壊と混乱渦巻く街中の騒音に別の音がまぎれ始めたのだ。

それは複数のプロペラ音。

かすかに聞こえてきたそれは、すぐに内臓を震わせるほどの轟音に変わった。

「ウィッチ!?!」

周りの誰かが叫ぶ。

ウィッチ。

それはストライカーユニットと呼ばれる機械を装着し、ネウロイと戦う魔女たちの総称。

助けが来たんだ、とまた別の誰かの歓喜のこもった声が娘に届く。

事実、彼女達は銀色のネウロイたちへ応戦を始めて、ネウロイを撃破していく。

だがそれでも住民全てを助けるには至らない。

そもそもウィッチの数が、ネウロイの数に対して圧倒的に足りていない。

その所為で、街全域をカバールシきれないのだ。

更に魔女の箒であるストライカーユニットの性能もお世辞にも良いとは言えない。

この時期にはまだ宮藤理論を反映させたストライカーユニットは実証試験段階である為、マージンを取った戦いをするのであれば、出来るだけ多数対一という数的優位を作ってから戦わなければならず、撃破スピードが足りていないのだ。

それにウィッチたち自身もエースが揃っているという訳でもないごく平均的なウィッチたちであり、必死に戦ってはくれてはいるが、多くを望む事はできなかった。

何もかもが足りない戦場。そしてそのしわ寄せを食うのはやはり、一般人だった。

戦闘の余波による被害も無視できないものだ。

流れ弾やネウロイが墜落した際の衝撃など、新たな脅威が生まれる。

そして件の家族にもそれらは襲い掛かった。

「ああっ!？」

家族のそばにあつた建物が倒壊する。

避けきれず、父親の腕から投げ出された娘は通りを転がる。

衝撃と痛みに身体は震え、涙が流れた。

しかしだからといって、ずっととうづくまつたままであることも出来ない状況だというのは幼い身でも分かる。

歯を食いしばり、なんとか顔をあげると、

「おとーさん、おかーさ……!？」

目の前には崩れた建物と、その下敷きになっている両親の姿があつた。

「おとーさん! おかーさん!」

慌てて駆け寄り呼びかけかけるが、二人共気を失つたのか返事がない。

服や腕を掴んで引つ張り出そうとするが、瓦礫に引つかかっていたり挟まっていたりと上手くいかない。

ならばと瓦礫をどかさうと持ち上げようとしてもできる訳もなく。嫌だ嫌だと、力を込めるがどうにもならなかつた。

「起きてよおとーさんおかーさん。早くしないと死んじゃうよ!」

動かない。揺さぶっても反応がない。

それどころか足元には血が流れてきた。

「起きて！　ねえ、起きてつてば！」

広がる血溜まりに気付いて声を荒らげても、二人が目覚めることはなかった。

そんな娘に追い打ちをかけるように、戦闘の流れ弾であるネウロイの光線が瓦礫の山に直撃し、またも吹き飛ばされた。

「……………ツツ!?!」

先程よりも長く飛ばされ勢い良く地面に叩きつけられる。今まで感じた事のない痛みに身じろぎ一つままならない。

だが辛うじて首だけは動かせたので両親の方に振り向く。

煙に視界が閉ざされていたが、次第にそれも晴れる。

そうして通った視線の先には、

「え、……………あ」

なにもなかった。

瓦礫の山も、それに押し潰されていた両親の姿も。

あるのはネウロイの光線が着弾して出来た、大穴だけだった。

その光景を見た娘は静かに涙を流し、静かに意識を失った。

次に目を覚ますと既に戦闘は終わったらしく、静寂が辺りを包んでいた。

まだ身体が辛い、痛みを我慢してなんとか立ち上がる。

周辺を見渡すが、ネウロイもいなければウィッチもない。生存者すら近くにはいないようだった。

大穴に目を向ける。

両親の事を考える。逃げている道中で見た光景のように、ネウロイの光線によって蒸発したか、身体をバラバラに吹き飛ばされたか。

少なくとも、そんな酷い死に方をしなければならぬような人達では無かった。

……なのに、なんで死んじゃったの？

死ぬ。いなくなる。二度と会えない。辛い。悲しい。無力。助けて。痛い。どうしよう。

様々な感情や想いが心の内を渦巻き、それらは徐々に混ざり合って固まり、黒く重いなにかになって心の奥に沈んでいく。

それをなんと言うのか娘には分からない。幼さ故に語彙がない為なのか、そもそもそれを表す言葉がない為なのか。

ただただ呆然とするしかなかった。

そうして暫く放心していたが、やがて彼女は大好きで、しかしいなくなった両親の為に祈りを捧げ始めた。

「……おとーさんおかーさん。ありがとう。さよなら。行くね」

長く、念入りに祈りを済ませた娘は、大穴に背を向けて歩き始めた。

ただただ、抱えきれない程の空虚感だけを胸に。



「報告。本日ネウロイの出現地点へ偵察に行った所、街は壊滅。ネウロイは全て撃破されていましたが生存者はゼロ、迎撃に出ていた友軍も壊滅していました」

「相打ちかしら？ ウイツチの死体は？」

「既に遺体処理をした上で彼女達の所属部隊に引き渡しております」

「ふうん、ご苦労様。全く、人手が足りないからってうちのようなどこにこんな雑務を押し付けるなんて、あそこの部隊ももう終わりかしら。ま、どうでもいいけど」

「それともう一つご報告が」

「ん？ なにかしら」

「……帰還中、街からの避難民と思しき少女を保護。現在治療中であります」

「なに余計なことをしてるのよ。捨てておきなさいよそんなの」

「……それが、使い魔と契約しているらしく、魔法力が発現しているそうです」

「へえ、その子魔女なの。しかも状況的に戦争孤児よね？ それはいい拾い物したわね」

「……………」

「うふ、その子はどれくらい持つのか楽しみね？」

女が、嗤った。

チャプター 2 A



ツエツイーリエが目覚めると、見慣れない木目の天井が目に映る。

「……………ハハ、どハハ？」

窓から指す日で今が昼間の時間帯というのが分かるが、起き抜けの所為が記憶が繋がらない。

どうやら簡素なベッドで寝てたらしい。床で寝るよりはマシな程度で、あまり上等ではないみたいだった。

少し身体を起こすと痛みが走る。見下ろすとそこかしこに治療の跡があった。

そこまで確認して、

「ああ……………」

と、ツエツイーリエの口から溜息が零れた。

彼女は思い出す。ネウロイの襲撃に遭い、家族を失い、そして逃げてきた事を。

その事実にも、思わず自身の身体を抱きしめる。

夢だと思いたい。しかし巻かれた包帯が紛れもない現実だと彼女に突きつけた。そこでハタと気づく。そういえばこの治療は誰がしてくれたのかと。

辺りを見渡すと、やはり見慣れない大きめの部屋に六つのベッドが二列に並んでいる。

しかしそのどれもが自分が使っているのを除き空き状態で、ツエツイーリエ以外の姿は見えない。

部屋の隅に設置された棚には、詳細は分からないが医療品が覗いているので、病院かとあたりをつける。

少し離れた所からは喧騒が聞こえる為、この場所が無人ではないことは分かるが、一体ここはどこでどうしてここにいるのか。やはりそれが分からなかった。

と、

「あら、目が覚めたのね」

声をかけられた。

部屋の入り口から姿を現したのは白衣を着た女性だ。

眼鏡を掛けた茶色い三つ編みの女性がカルテ片手に、ツエツイーリエを見ていた。

「あの……」

「色々聞きたいことはあるのは分かるけど、取り敢えず診察させてもらえるかな？」

「……はい」

出鼻を挫かれ何も言えず、大人しく診察されるがままになるツエツイーリエ。
それから暫く。

「うん、大丈夫そうね。まあ、擦り傷とかは暫く痛むだろうけど、それくらいは必要経費ってことで」

その言葉を最後に聴診器を首に掛け、女医は自身の仕事を終えるのだった。

「それで、あの」

「ん？ ああ、今のあなたの状況ね。まあ、話してもいいけど後で今後も含めて上司に纏めて説明してもらおうから、我慢してね」

「はあ……」

「それじゃ早速で悪いけど、その上司があなたが目を覚ましたらすぐに連れてきなさいって命令してるから来てもらおうわ。歩ける？」

「な、なんとか」

「じゃ、ついてきて」

そう言っさつささと歩き出す女医。

その白衣の下は、軍服であった。



女医に付いて歩くと、確かにここは軍事施設であるというのが分かる。

見かける姿、すれ違う男女、そのどれもが軍服やそれに類する姿なのだ。

「軍人は珍しい?」

「はい。遠目で見ただことはありますが」

「そう、そのうち慣れるわ。……嫌でもね」

「……?」

女医の言い方に違和感を得つつも後を追う。

途中、階段を上り少し歩く。

「今からあなたが会うのはここで一番偉い人よ」

「えっ」

「いつまで保つか分からないけど、ここでやっていくんだから当たり前でしょ? ああ、

緊張しなくてもいいわ。するだけ損だから」

「……それは、どういう?」

「すぐに分かるわ。アレは本当の魔女——いや、この世で一番俗っぽい人間か。どちらにせよ、まともに相手しないほうがいいわ。ま、吞まれないように気を付けなさいな」

脅しのような、忠告のような、そんな言葉をかけられつつ辿り着いたのは、これまで見たどれよりも細かで洗練された意匠が施された扉の前だった。

埋め込まれたプレートには『司令官室』と書かれていた。

わざと見たものに威圧感を与えるような佇まいだったが、そんなことはお構いなしに女医は扉をノックする。

「起きたから連れてきたわよ」

部屋の主の許可もなく勝手に扉を開けて中に入る女医。

それに続いてツエツイーリエも中に入っていく。

「失礼しま……」

室内は執務室と応接室を兼ねているのだろう。手前に背の低いテーブルとそれを挟むように左右にあるソファがある。

奥には仕事用に天板の広い机と座り心地の良さそうな椅子が設置してあった。

それらを含め、部屋にある棚や姿見、調度品などは素人目からしても高価だというのが見て取れる。

そして、この部屋の主が奥の椅子に座ってツエツイーリエを見ていた。

長く鴉のように黒い髪で、鋭い目つき。同性のツエツイーリエから見ても息を飲むほどの美貌だ。

含みのある笑みでこちらを値踏みするかのようなその雰囲気は成る程、魔女や物の怪の類と言われるのも納得のできるものだった。

「あら、もう起きたのね」

その声に、ツエツイーリエは警戒心を持った。

この人物に気を許してはならないと、確信めいた感覚が胸の内を占める。初対面の相手に思うことではないと理解してはいても、だ。

理屈や感情ではなく、本能からの反応にツエツイーリエは戸惑った。

「ふうん、勘は悪くなさそうね」

そんなツエツイーリエの様子に、女は笑みを深くする。

「そんなに怯えられると、話を進められないだけど？」

「え、あ……、すみません」

「まあ良いわ。取り敢えず、自己紹介はしておこうかしら。カールスラント帝国陸軍第901特殊陸戦部隊『ヴェアヴォルフ』隊長、ヴィクトリア・ワグナー中佐よ」

「ツエツイーリエ・ベツセル、です」

「ところであなた、どこまで現状を把握しているのかしら？」

「……えっと、住んでた街がネウロイに襲われて、逃げてどこかの道で力疲れて倒れて、

気付けば……」

「大方の予想通りね。家族は？」

「襲われたときに両親は……。親戚とかは、分かりません」

「天涯孤独、という訳ね。やっぱり都合がいいわね」

「？」

「あなた、ここでウイツチとして働きなさい。いやなら出て行ってもいいけど、アテナんかないわよね？」

「……………」

「ま、それ以前にうちって特殊部隊だから、知ったからには逃がさないんだけど。それでも嫌だと言うなら、ねえ？」

子供でも分かる脅しである。

だから、ツエツイーリエは苦虫を噛み潰したような顔で頷くしかなかった。